

紙の弾丸

社会主義学生同盟
同大支那共闘会
5、39、4、24

戦士マ田馬 定冊
一五〇YEN
生政を闘うていませう

階級斗争の戦後や三の転換点と、 我々、新左翼の任務

I 概説

とりわけ敗北する争ひ、斗つて敗北する争へ全
く突つた体験をもつての事である。
四、一七ノトクは、セネスト的進退を示した故
に、又下の中止口、日本の労内運動に大転換を、頭
在化させた。戦後階級斗争の又三の転換が、急激に
始つてゐるのである。

取換口、奮斗方式―産業系―行動闘争方式の崩壊
を進める事により、奮斗方式のつまつていた。終
済民同左派―太田、岩井ラインの崩壊をも明らか
にしてゐる。更に、50年代型の政府―軍―市民的政治
斗争の崩壊を示してゐる。

四、一七世所をセネスト階級斗争の性格に對する
新左翼の任務の明らかにならなければならぬ。

II、資本主義の成長の巨面

58年(政制交換性の回復)E.F.T.A. E.E.C.の形
成は、資本主義世界を、安定から、激動へとた
たきかへる同時に、以前より、興つた階級斗争の性格
を明らかにした。

58年アルゼンチン内戦を契機とするフランスの階
級斗争は、日本に於ては好景斗争としてあらわれ
た。これは、資本主義の成長期の突入期の階級斗争を
あらわした。

だが、62年から64年の階級斗争の性格は興つたよ
うなわけを示した。62年ベルギーのセネスト、英国の
反共闘争突入斗争、スト、イタリアの一ヶ月間の
政治斗争、ドイツ金属労働者のセネスト、アメリカ
の失業問題の現われとしての果敢の暴動、これら
ヨーロッパ、アメリカのヨーロッパのアートの斗争、
資本主義の停滞への突入期の階級を示した。合理的
インフレ、賃金抑止といった停滞の特質が、また
また、全世界的階級斗争の一つの局面を示し
たのである。

今年、日本の奮斗―四、一七半日ストは、
、公労協が、突入すれば、セネストとして、支配機
構を振盪させるものである。

III 戦後日本階級斗争の 七表目録

戦後資本主義の転換期といった。これは、この時代の
区別が出来るのみ。
15年を戦後から40年の大敗北に致る過程は、日本の
革命の展開と各所転換期であった。

文責 竹 野 蔵

野史提出―スト―マックススト―工場占拠、生産
管理―セネストという日本の革命の法則の一端を示
した。二、一セネストに於ける、G.H.Q.の弾圧と日産
の屈服という屈曲よくか、四九号の悲劇として現われ
た。

又一の転換期は、五十年であった。二、一セネスト、
四九年の敗北という共産党が、戦時的労働者に對する
事により、資本と共に登場した。戦後以後の転換期、地
域斗争方式を切り抜けた。朝鮮戦争による支配階級の弾
圧に對峙して、又産界の大交際と山村工作隊の方式
が完全に敗北を示していった時期であった。

又二の転換期は、五六年からの高層に代り、太田、岩
井ラインの登場であった。組合民主主義と産別統一斗争
(奮斗)という方式は、資本主義の成長期とマツチ
の、一争に労内運動の主流を握った。

この時期は、六〇年代と三〇年代に明瞭にして、上
層斗争と市民的政治斗争とをその特質として示した。
又三の転換期は、岩井、三〇斗争の敗北を伴つてい
る。

それは、興つても、日本資本主義の成長期の挫折と百
曲化、凶悪な階級斗争に現れたのである。

資本主義階級の労内政策は、第四期、全労の首成、労内
組合の分裂から総評の成立へ、労務協調政策へと展開し
てゐる。具体的には合理化を技術革新との関連で遂行し
、その過程で、配置転換、近代労務管理体系の導入、
労内労働力の変化に對する転換指導入等により取組を配
を強化し、労内階級を直接資本が、掌握する事により、
取組に於ける労内組合を弱体化し、これによる労働者
の直接階級を企業側が、セネストの優越と結合させ
る事により、労務協調は利を布くというものである。こ
して、官制と臨時工、社外工、下請工の整理、希望返
販、新規採用停止として展開した。又、他方、民間から
、はかざる取組活動家に対して、格下げ、処分配置転換
、口實の政治政策によつて、孤立化させ、パージしてい
くという手段を遂行してゐる。又、官制、安部(三〇世)
六〇年(一)から、四年に(二)つて、爆発の転換を
持つてきたのである。

IV 表目録とセネスト

自由化による階級斗争の激化は資本主義階級を、
激化の自覚化―若くは激化―、階級制政策を促した。こ
れは、インフレは、官制に進展をみせた。そして、民間の
依頼して、中層の労働者に代つて、高層の労働者が、大

民間は、これに對する反感を覚へる。青年のハ
ツルセとは太田ラッパを破きぬらしめのである。
全線總評の監査路線の進出に反抗して、太田は自
ら反幹部斗争を社会主義協会を利用する事になり、
ありては、延命を試みる。「絶対的五十戸以上を
以て」建化部内でのスルドイ、強硬的ストを以て
いう。太田ラッパは、インフレ、幹部強化により、
不満をウツキキして、反幹部者に火をつけ、公労協
から全民間産業に波及するかに見えたり。いわばセネ
スト的株相が予想され、これは何よりも、対幹部以
後の資本主義の構造的危险と市場再分割成と停滞局
面に於ける階級斗争の性格を示している。

ハム協協協協協

日本を支配権の中核。その根幹を以て、
刀の刃をさす向き、まことにセネストへと発展する
事を明白にしたのだが、それは日本の支配権が、
さびれてキリであり、従って、強硬的に責任体制に
よつてのみ支えられているのである。すなわち、干
渉の政々ムラ(公公黨のストバク奪)によつ
て、一方的に決まされる低賃金を企業界に波及させ
る、それ故に、逆に公労協協協協の弱いには、企業界
に波及、セネストへと発展、この様にして体制の
根幹をさすむくものである事の中核。

ハム協協協協協

賃金斗争 → 公労協スト → 民間へ波及 → セ
ネスト → 専横力、暴力の代へ → 専横力との
衝突という性格が、政治斗争に付加されるであろう
事を示した。かかる幹部者層の組織的、地獄的なる
政治斗争の性格の形成は、知年代の政治斗争 → 取
法、担保型の斗争の崩壊に代る新しい政治斗争の性
格の登場を意味している。

知年代の政治斗争 → 市民的政治斗争の崩壊と新
しい型の政治斗争の時代が押しつけられるのである。
知年代の政治斗争 → 市民的政治斗争は、幹部者層
級の分裂 → 上層と下層の別へへの分断に現れられ
ていける。在野幹部者は無組織であるが、無組織
であり、その事により、上層幹部者は、資本から資
金の押しつけをもち、そうする事により上層幹部
者は、階級としての意識が形成されなかつたのであ
る。「下層を打ち下ろし」、「賃金を保ちたい」と
いうエゴは、資本を階級に支え、研所法、K
取法、衝評、安原といふ民主主義への攻撃を
しかけてきた時、即時的反発を示したものである。

原水協(平和M)、総評(幹部M)、全労連(幹
部M)は市民的政治斗争を支え、二本柱であった。
だが、担保以後、全労連が崩れ、味方、原水協が
崩れ、そして、今日の善利は、総評Mの崩壊、日本

的組合主義の崩壊)を示した。
市民的政治斗争(民主主義エゴ斗争)は崩れ、むし
しろ、上層的、根底的の性格が、次の政治斗争の
性格を規定するだろう。

賃金斗争 → 専横力の衝突 → 反権力斗争(全労と
しとの憲法斗争)という性格が予想される。

太田・山崎日かから中央へ
10年間、幹部Mのヘゲモニーを握つてきた民間左派
太田、山崎ラインは、四一七ストの中止、裏切り
によつて命を落とす。太田の死は、民間左派 → 日本
的組合主義の基盤の揺らぎに繋がっている。

近代の労務管理、合理化、賃金抑制といふ、資本家
の攻撃は、善斗方式 → 差別賃金斗争方式を完全に行
きづまらせ、民間左派の基盤を崩した。むしろ、資本
ベッタリの全労、資本との協調の宝樹路線の進出は
事であらわれている。

公労協から、全労連が脱退するだろうといわれ、又
交通委員会から私鉄が脱退するといふ事が出たといふ
。差別賃金斗争方式は、崩壊しつつある。全労、宝
樹派は斗争体制を下部から上部にあげる事により資本
との交渉、協調を進め、そうする事によつて差別賃金
を拒否する。

善斗方式に代わつて競争の統一行動(ヘゲモニー)は、
本質的に、地域斗争の性格が強くなるであろう。
正副幹部総合運動は、より、地域的となり、自然発生的
となるであろう。

社会主義者の分類

幹部Mの転換に規定されて、社会党は、分裂の局面
にある。社会党大会に於ける左派の勝利は、善斗幹部
者の中にある危機の反映であつた。太田ラッパに代
つてこれを利用され、太田のワケを越えられなかつた、社
會同、社会党又協会に戦線にさしつかへつていふ。战斗
的無党派に立脚し、新在野として自己を位置づけるか
、社会党の下請けになつてしまふかである。

労働運動に於ける宝樹派へのヘゲモニーの移行は、
社会党主流、江田 → 成田 → 宝樹といふラインに意識し
て斗争を意味している。これに對して社会党左派は、新
しい独立社会党を作るという動きを示している。社会
党左派は、战斗的無党派のエネルギに立脚しない限
り敗退のウミ目になるだろう。

日本社会党の社会民主主義

社会党の四中総路線の崩壊の帰結をそのの完畢事ハ
示した。
「ストライキ及対し」民間は、ちやうど、はねあが
り、といふ善利は、幹部Mの崩壊、日本

一 社会主義論を目的のありて見る気味する。社民はヒトラーの手先であり、ストライキは極左である。ヒンズレー、曰く対して「運折論は組織論」といふ観望での批判がなされてきたが、従来の平和Mは組織論の中心に在るといふ方針から、今や労働組合の中心に在るといふ観望を掲げ、これに

から、従来の50年代Mは、統制の組合主義のいわば補完物としてあり、曰く平和Mを中心として政治的争いという関係は、離れ去り、社民と曰く争いの時代が来るといふのである。共産党のオス組は、より大事業上進行するであろう。

V 新左翼の展望と課題

吾々新左翼の立場を述べ、労働者階級の意識とは何か、それと4、7スト中止以後、形成された形に、無党派を置く。戦時的無党派活動家を組織し、これに力をつける。

① 近代的管理の発展へ、労働者化、賃金抑制等、資本の攻撃下、全労組の力、宝樹派は協調し、共産党はこれを助けている。ヘストライ主及対に代表されるよう、資本の攻撃を有効に指導する事は、既成組織に比べて、見られぬ。

4、7ストは、その中止によって、労働者の中、矛盾を、弱く、せき止めている。反合理化等を具表、下に賃金争いを、極端性そのものを、見られぬ。

② 市民的政治的争いの崩壊は、同時に、労働者階級の政治的争いの性格を生み出しつつある。競争、争い、スト、労働者の暴力、反政府的争い、性格を、単に技術的準備し、戦術的準備としての、対抗するのには、なく、まさしく政治的準備——全階級の包括的視野を持つ、政治的準備に、不可分なものとなる。

③ 分裂の下の我々の組織方針は、何よりも、全階級の視野に、立つて考えねばならぬ。東西共産主義者同盟の労働組合における労働、組織方式も、単なる戦術的争いから、全階級の包括的視野を持つ、政治的組織として、脱皮し、見られぬ、争いを示している。

更に、労働者を、組織として、増々増大している、戦時的無党派を、結集する、全労組として、の、全労組共産主義労働者同盟を、新左翼の全労組の組織として、急進的に、タイナミックに、促進させねばならぬ。

共産主義者同盟の再建は、単なる、カント、残部を集めるだけ、なく、労働者の、戦時的無党派の組織的、思想的、結集の上に、考えねばならぬ。

労働者の、戦時的無党派を、単なる、戦術的争いから、全階級の、包括的視野——政治的準備の、次元に、高めて、全労組共産主義労働者同盟に、結集させる事は、新左翼の、緊急の、課題である。(七三)